

なぜロリコンが悪いのかとぼんやり考える  
**Sick**な俺は今川氏真として戦国転生するま  
で福島で歴史の非常勤講師を10年してい  
た。生物学的に言えば健康な若い女(少女)  
を求めるのは普通のことだと思われる(その  
方が健全な赤ちゃんを得られるから)。



江戸時代ではポリコレがなかったので女性は17になっても結婚できなければ行き遅れの不具者だと疑われた。まー今は江戸時代じゃないので、17で行き遅れなどと言うバカはいない。どころか20歳以下は未成年として男の性欲から守り大事に学校教育を受けさせ庇護されねばならないとなっている。確かにそれは正論である。

だが俺に言わせると明らかに勉強にむかない”身体は豊満”で”頭空っぽ”な娘が沢山いる。こういう娘たちに本人が望んでない学校教育を施すことが本当に正しいことなのかと。

男性も終身雇用がなくなって明らかに女性にも共働きを求める風潮が強まってきている。だから案外結婚できるのは女性も男性同様に稼げる女性のような気がする。だから可愛くて勉強できない女性は付き合ってもらえても結婚してもらえない傾向がありすこぶる哀れである。日本にとってこのような資源(リ

ソース)の無駄が発生し、少子化が起きていることは残念極まりない。彼女たちは若さだけが武器なのだから武器の威力がピークである時に婚活すれば結婚相手も見つかり、幸せになれるのではなかろうか。現実の彼女たちは学校で苦行のような授業を強制され、その間結婚の武器である若さを無意味に失っていく。

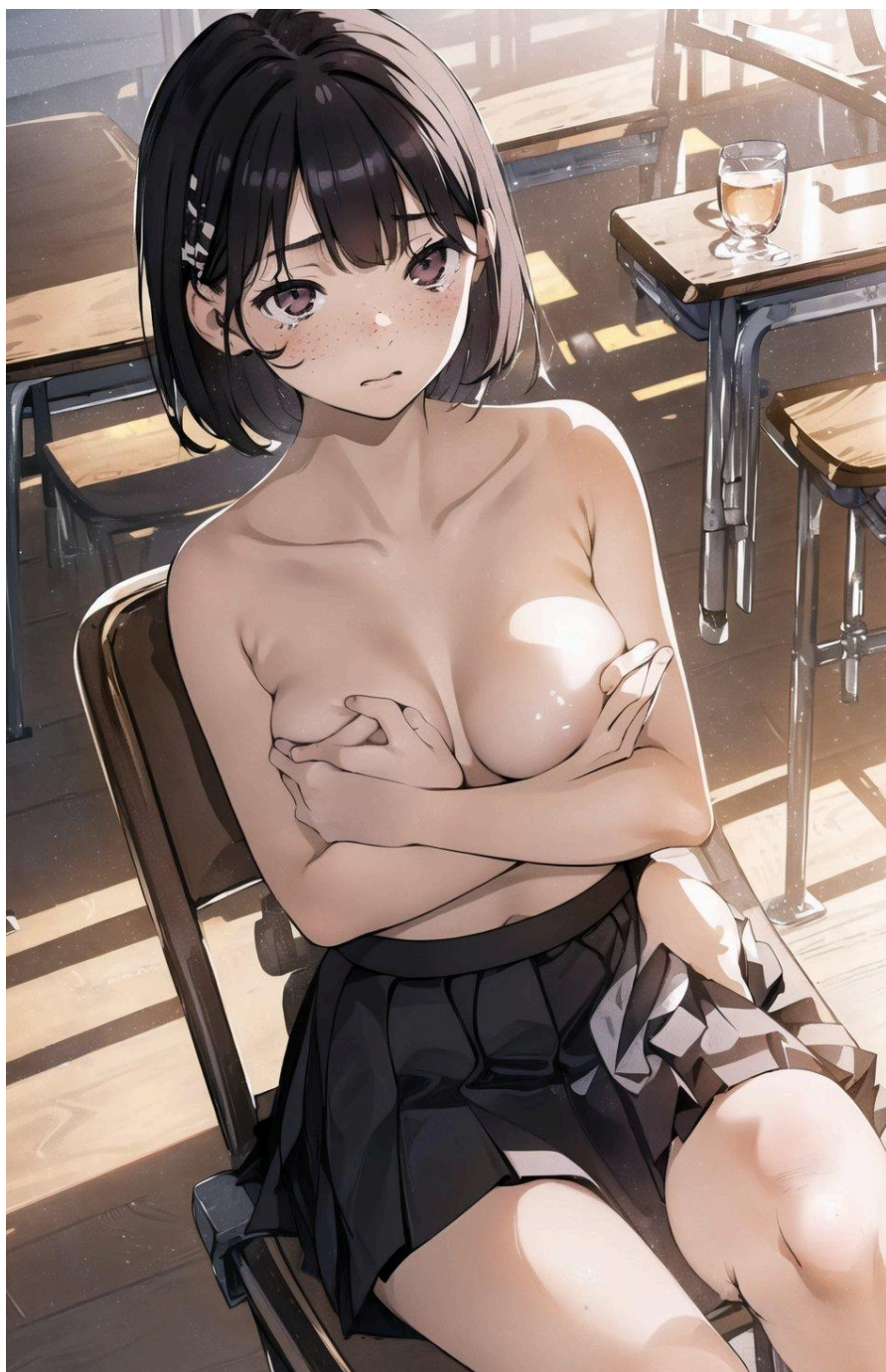
俺も子供を持たない弱者男性なので、そういうエロい身体 of 生徒たちをオカズにしてオナニーすることで結婚出来なさそうなエロ娘たちを供養してきた。



でも結局一番オカズとして多用した生徒は瑠花で彼女は頭がよく豊満な娘だった。いつか



卒業して県庁に勤めて堅実に結婚するタイプの娘。



瑠花「先生、藤原氏が行った摂関政治の肝って何」  
俺「子作りだ」

瑠花「そんなイヤらしいこといわないでよww」

俺「嘘じゃない。天皇に娘入内(じゅだい)させその子供を次の天皇にすることで摂取として政治を牛耳るのが摂関政治の肝だ」

瑠花「じゃあ、摂関家の娘はみんなセックスうまいんだべか」

俺「そうだべ。源氏物語もセックス教育のために書かれたって噂もある」

瑠花「ああ、確かにセックス描写多いべな」

俺「藤原道長の娘彰子と一条天皇が仲よくセックスさせるために書かれたんだ」

瑠花「ライバルの定子さんが既に皇子産んでるから。道長さん焦ったんだね」

俺「ま、俺等は教科書無くても出来るけどな」

瑠花「先生、イヤらしい」

俺「イヤらしもんか、いつも放課後ここ(美術部)でやってるだろ」

瑠花「だよね。じゃ制服脱ぐね」



俺「頼むよ」  
瑠花「先生、私みたいなブスが相手にいいわけ」





俺「.....君は(こっちが安心出来る程度に)可愛いよ」



瑠花「目が小さくて、そばかすだらけなのに」



俺「そんなこと言って乳首コリコリ」



瑠花「あはん」  
俺「股間もぐっしょりだね」

瑠花「もーインコウ教師め」

俺「じゃあ、黒板に向かって手をついて尻を向けて」

瑠花「うんしょ、はい」

転生前の瑠花は背が低くてショートでそばかす顔で目が小さくて少年っぽいのに胸がDカップもあるのでギャップ萌えが激しかった。俺はそんな彼女の肉付きの良い腰を後ろから抱きしめて、躊躇うことなく分身を突き入れる。

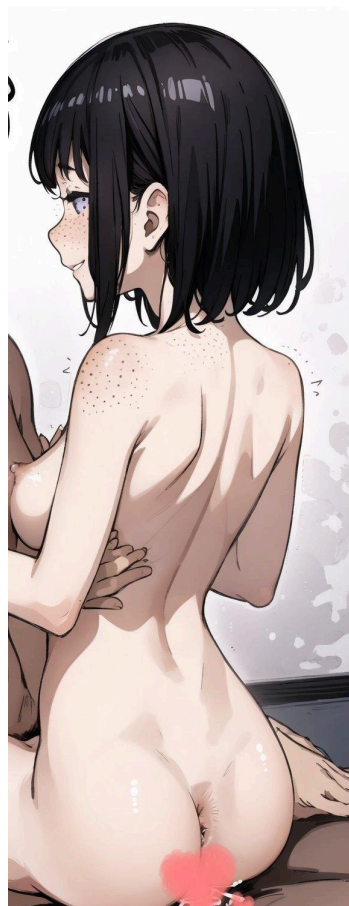
瑠花「あああ、か、硬い」





俺「お前のエロおっぱい触れば誰でも硬くなるわ」

瑠花「あああ、先生やばいべ」  
俺は妄想のなかで少年おっぱいな瑠花を自由に犯しまくる。



それは虚しいけど至福の時間だった。俺は形ばかりの美術部の顧問で、部長で歴史好きの瑠花とは比較的よく話す仲だった。でも一緒に転生して彼女は凜とした美形の瑠璃姫になりスキがなさ過ぎて俺は元教え子をもて余している。





「ほお、奥方が綺麗すぎて上手く欲情出来ない？」



鷹狩の最中に元康は大声でいった。戦国時代を終結させた英雄もまだ二十代で、年相応に軽率なところもあるみたいだ。

「ちと、声が大きいぞ」

俺は周りの連中に聞こえないかと周囲を見渡す。

「これは、元康、粗相《そそう》を致した」

鷹狩はこの英雄が目茶苦茶好きなアクティビティらしくて、俺はたまに誘われる。天気がいいし、富士山を背景にヒョーっと気持ちよく獲物を狙って空を旋回している鷹を、下から仰ぎ見るのはなかなか気持ちいいものだ。周りに親衛隊である小姓たちが俺を守るように完璧な乗馬で移動する。



「なんか、美人って緊張するだろ。ちょっと隙があるほうがいいっていうか……」  
俺は目茶苦茶正直に弱みをさらけ出す。これくらいスペック高い英雄に虚勢は無駄だろう。  
ところが  
「実はこの元康も美人は大変苦手でござる」  
と、意外な返事が返ってきた。

(そうだ、この人恐妻家だったんだ)

俺ってこんな記憶力ひどかったっけ、と思いながら俺は元康の恥ずかしそうな表情を見る。

「我が妻は今川三河で一番の見目《みめ》麗しき者。しかしながら気性が激しく難渋しております」

「瀬名はなあ、美人を鼻にかけてるからなあ」

俺は適当に話を合わせる。ちなみに元康の嫁は瀬名の方と言われる。彼女は関口氏と呼ばれる今川一門の出身で、義元おとんは元康を結構大事にしてたってことだ。

「仰せの通りで。それに比べればお館様の奥方は我が妻に相当見劣るにせよなかなかの美人。しかも、性質は穏やかで元康羨ましい限りでござる」

(何気に嫁のスペックでマウントとってきてるよね、あんた)

「でも、そっちは既に子が二人もいるであろう」

「実はコツがあるのです」



俺たちはいつの間にか切り株に腰を下ろして、熱心に美人妻対策について協議していた。

「妻の美に馴れるためにはまず、絵師に妻の絵を描かせるのです」